小さなサンタと孤独なトナカイ

転寝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さなサンタと孤独なトナカイ

【Ｎコード】
Ｎ０９７２Ｊ

【作者名】
転寝

【あらすじ】
御堂孝平という少年はクリスマスという強大な敵とエンカウントしてしまう。
孝平はサンタという悪魔の武器を使い、クリスマスに対抗しようとする！
しかし「それを言うならサンタではなくサタンじゃないのか？」との突っこみが。
孝平が思わず取った行動とは…！

※内容と関係はまったくありません

さようなら今年の青春。そしてこんにちは来年への希望

「はあ……最悪だ」

もっと詳しく言うと、最悪な日だ。
俺は目の前にある色鮮やかなイルミネーションに飾られた町並みを見てそう言ってしまう。

今日はクリスマス・イヴ。
明日はクリスマスだ。

「一人身にはつらい……」

泣きそうだった。
いや、心の中では泣いていた。

春ごろには今年のクリスマスまでに彼女を作ろう！　と意気込んでいたはずなのに。
……今となっては目も当てられない。

通学の途中だったのだ。ということはまだ8時。なのに、すでに街にはカップルであふれていた。

巷では、クリスマスにカップルを見ると心の中で大変な悪態をついてしまう方々がいるそうだ。
自分はまだ、そこまでにはなっていないがそうなるのも時間の問題だったろう。

――目に毒だ。そう思った俺は走って学校へと向かった。
もっとも、学校に着いた所でそれはあまり変わらなかったのだが。

「なんでカップルがこんなにいんだよ！」
「そういわれても」
俺は思わず友人の高坂（こうさか）にあたってしまう。
でも俺は反省しない。なぜってコイツは彼女持ち&何股もかけてるサイテーな男だからだ。

「はあ……高坂、クリスマスってなんなんだ？　単に俺たち一人身を苦しめようとする悪行じゃないのか？」
「絶対にそれはない」

「というか、一人身って、あれ。俺が紹介したミキちゃんは？」
「……何か、会話が続かなくて」

以前、高坂に紹介してもらった女の子がいたのだが、何分俺は女の子と言う生物に対してシャイだったため
気がついたら音信不通になっていた。

「はあ……お前、顔とかは普通にイケるんだからもっと頑張れよ……」

呆れ顔で高坂は俺に説教する。
……一応紹介してもらった身だから、女たらしなお前とは違うんだよ、なんて言えない。

「とはいってもだな、続かない物は仕方がないだろ」
「そんなんじゃ、いつまでたっても彼女できねーぞ？」
……ぐぬぬ。いかんせん向こうの方が正論を吐いている。
これに対抗できる手段は…
「ま、まあ？　か、彼女なんて今そんなに必要ないと思ったり思わなかったり？」
「どっちなんだよ」
いかん、彼女が欲しすぎて嘘がつけなくなってきている。
「も、もういい！　お前に相談した俺がバカだった！」
そして何故かキレる俺。男の子はいつだって繊細なのだ。

その後、高坂が俺にアドバイスだの、なんだの言ってきていたが全て無視した。
そして普通に授業を受け終えた俺は早々に帰る事を決める。
すでに後ろの方で数人がイチャついているが俺には聞こえない。ああ、聞こえないとも。
しかし、その数人の中に高坂が含まれているのを確認してしまった。

あんにゃろ……！
俺は腹の中に熱い何かを煮えらせながら学校をでた。

…その後は人通りの少ない所を歩いてるからだろうか、カップルを見かける事が少なくなったおかげで俺は少し冷静になっていた。

「まあ、クリスマスなんてこれからもいっぱいあるわけだし……」

来年だって再来年だって。
繰り返しクリスマスはやってくる。
だから今年に楽しまなくちゃいけない理由なんて特にないのだ。
……とは言ったものの、やっぱりクリスマスしたいよな。
冷静になってもやはりそこは変わらなかった。

「……す――は――……」

深呼吸を繰り返す。
心を完全に落ち着けるためだった。そして踏ん切りを付けるため。

「……よしっ！」

今年はあきらめよう。しかし来年こそは叶えよう俺のハーレム。
……訂正。来年こそは叶えよう一人の彼女！
そのおかげか、先ほどとは違って軽い足取りで家路につくことができた。

「ただいまー！」

我ながら純粋で清らかな挨拶だったと思う。

「おかえり。アンタは今日どっか行くの？」
挨拶を返したのは俺の姉である美郷（みさと）。
「いんや、どこにも。姉ちゃんは？」
「彼氏の家」
……落ち着け俺。その硬く握りしめた拳を今すぐ下ろすんだ！
「そ、そっか――」
「ちなみに幸次も彼女の家だってさ」
幸次とは我が弟のこと――なんだって！？
……い、いかん、落ち着け。
「そ、そう。い、いやあクリスマスだねえ」
顔を引きつかせながら俺は精一杯の見栄を張っていた。
「うん。アンタは――まさか今年も？」
「え？　……ああ、ま、まあ彼女とか今は必要ないかなー、なんちゃって」
「そう。まあ――その、がんばりなよ」
姉にまで憐みの目で応援される俺のプライドは脆くも崩れ去っていた。

「ふう……」

姉による精神的攻撃に耐えられなくなり部屋へと急いで避難した俺はため息をつく。

今日は色々と疲れた。
いや、まだ4時なんだけどね。

疲れたから、今日は早いが風呂に入る事にしよう。
うん、それがいい。お風呂でしっかり力を蓄えて、明日の地獄を生きぬかなくては。

脱衣所に入り、洗面所の鏡で自分の顔を確認する。
――別に、ブサイクってわけじゃないと思うんだけど……
そんなナルシスト紛いの事を考えていた俺はあることに気がつく。

「ん？　……なんだこれ」

鼻の頭が真っ赤になっていた。
寒かったから、だとかいろいろ考えられる事はあるのだが……

「それにしては――赤過ぎないか？」

しかし、気にしてもしょうがない。
明日になれば治っている事だろうし、真っ赤な鼻ってのも中々可愛くていいかもしれない。

……嘘だけど。
ただ、そんなことに悩んでいられる余裕が今の俺にはなかった。

そしてゆっくりと風呂に入り、体の疲れを癒した俺は風呂から上がった後、部屋でＴＶを見たり、ゲームをしたりで時間を潰していた。
その後、夜の１０時になって。

「ふわ……そろそろ寝るか」

欠伸も出たので、いつもより少し早いのだが寝ることにした。
今日はやっぱり疲れが多かったのかもしれない、精神的に。

そんなんで明日はどうする――なんて事を考えていたら意識がゆっくりと遠のいていった。

ジングルベルが一向に鳴らない

ガンガン、ガン――……ガンガン――。

何か、音がする。
眠っていたのに、大きな音がして俺は目を覚ましてしまっていた。
――工事？　こんな夜中に？
しかし、それにしては音が近すぎる。

――近すぎる？
そうだ、近すぎるんだ。そのことに気がついた俺は音がする窓の方へと視線を巡らした。

ガンガン、ガンガン！
「あ――――け…――――て！」

音は何かが窓を叩いているから出ていたモノだったらしい。
窓は閉めているため声が遠いのだが、辛うじて聞き取れた。

「……あけて？」

不思議に思った俺はカギを外し、窓を開けた――
その瞬間、俺は何かに抱きつかれ、反動で床に倒れ、思い切り頭を打って気絶してしまった。

――ね……――だ――ぶ……――？

少しの間気絶していた俺は、微かに聞こえる女の子の声に気がつき目を覚ました。

「ん……」

目を開けるとそこには――

「――だいじょうぶ？」

大きな二つの目で俺を見つめる小さな女の子が、いた。

「い、いったいなにが」

訳が分からなかった。

窓を開けたら誰かに抱きつかれ、そのまま倒れて気絶。その後目を覚ましたら目の前には女の子がいた。

――しかも目の前の子はサンタのコスプレをしているようだった。

少し可愛いと思ってしまった俺はオカシイのだろう。

頭の中で起こった事を羅列してみると、余計に分からなくなってしまった。

「よかったー。いやあ、まさかアレくらいで気絶しちゃうなんて思わなくてー」

えへへ――と付けたして目の前の女の子はそう言った

……ってことは窓から来たのはこの子だったのか！？

「って、ここ3階だぞ？」
「そうそう、それで手こずったんだよ。まったく、煙突くらい用意してよね」
「煙突って、最近の家には殆どないだろ」
って何の話をしてるんだ俺は。
「というか、そういうことじゃなくてだな…」
「？」
言いたい事がありすぎて何から言えばいいのか迷ってしまう。
……一度にボケすぎるとどこからツっこんでいいのか迷うのと同じ原理か。
ここは順番に聞いて行こう。
「――まず一つ、君は誰？」
「私？　私はサンタだよー」
……嗚呼、頭の可笑しな子だったのか。
なるほど、だから彼女はサンタの恰好をしているのか。
まあ、これで頭が残念な子だというのは、わかった。
「次に二つ目。何しに来た？」
急に窓から人の家に入ってくるような残念な子だ。
大方、入ってみたかったから、とかいう理由だろう。
「クリスマスでしょ？　だからトナカイ――君を誘いに来たんだよ」

――トナカイ。
何を言ってるんだこの子は。
…よし決めた。適当に話を合わせておいて帰ってもらおう。

そう考えたとき、急に部屋のドアが動いた。
――まずい。
小さな女の子と一緒に居る俺。
しかも今日はクリスマス前日の夜。こんな所を誰かに見られたら、
というか親に見られたら色々と困る！

「あああああああ！」

俺の叫びはむなしく、結局ドアは開ききってしまった。

「……何かすごい音したけど、なにしてんだ？」
ドアを開けたのは俺の父親だった。

「い、いや、こ、これには深いわけがあって！」
「ん？」

必死に説明しようとしている俺。
しかし俺の父さんは不思議そうな顔をしている。

「つ、つーかこの子が勝手に侵入して！」
「……落ち着け、この子って――誰だ？」

誰って！　あんたの目の前にいるじゃないですか！サンタ服を着た
小さな女の子ですよ！

「……誰もいないじゃないか」
俺の部屋を見渡して父さんはそんなことを言う。
「いや、ここに」
思わず俺は女の子を指さす。
「……頭大丈夫か？　幻覚だぞ」
「へ？」
「お前の示すとこには何もない」
「……」
どういうことだ？
「多分、疲れてるんだよ。早く寝た方がいい」
「……」
そういってもう一度、早く寝ろよと付け足して父さんは出て行った。
もう一度女の子を見る。すると女の子は俺に向かって笑顔を見せてきた。
もしかして、これは俺の幻覚なのか？
「え、幻覚？」
女の子の体を触りまくる俺。いつもだったら嬉しいはずなんだけど今はそうでもなかった。
「く、くすぐったいよ」
……これが幻覚には思えないんだが。

はて。こうなってくれば父さんがオカシイのか俺がオカシイのか。
俺がそうやって悩んでいた時、彼女がこんなことを聞いてきた
「ねね、私からも質問いいかな？」
「え、ああ。うん」
急だったから生返事になってしまう。
「君の名前は？」
「俺の名前？　…御堂孝平（みどうこうへい）だけど」
「こーへーか。私の名前はユメだよ」
「ユメ？　……それだけ？」
「うん。サンタにはそれだけで十分なのだ」
えっへん――そんな感じでユメは言う。
いや、別に胸を張る所でもないのだが。つーか胸ねえ。
「あ、いま失礼なこと考えたでしょ！」
何でわかるんだ。
「まったく、女の子はそういうのに敏感なんだからね」
……恐るべしユメ。
うん、普通に会話してたけど。やっぱり気になる。
「つーか、君は――ユメは幻覚なのか？」
「え？」

俺の問いに思わず唖然とする彼女。

「幻覚って、私が？」

「ああ、だって急にサンタとか言われても信じられないし。つーか親父には君の姿が見えないみたいだったし」

「……あのねこーへー。折角こうして目の前で会って喋ってるのに幻覚って言われたら、流石の私でも傷つくよ？」

「いや、だって」

「……信じられない？」

心配そうに彼女は聞いてくる。

「いや、信じれる方がおかしいと俺は思う」

「ふうむ…」

「そもそも、なんで俺がトナカイ…なんだ？」

「ああ、それはね鼻」

鼻？

……5秒ほど悩んであることに思い当った。

「え、まさか。赤いから？」

「そうだよー。クリスマス前日に鼻が真っ赤になるのはトナカイに選ばれた証なの」

ええええ。

「トナカイってトナカイっていう動物だろ？なんで人間の俺が」

「クリスマスにおけるトナカイと、普通のトナカイとは違うんだよー」

むむむ、ややこしいな。

しかしここまで聞いても納得できない。つーかできるわけねえ。

「というか、それだけで俺がトナカイになるのか？　鼻に関しては偶然赤くなってたってことは…」

「私の姿が見えるでしょ？　それがなによりの証拠だよ」

「……」

うん、どうしよう。

何処かおかしい。けど何処がおかしいのかわからない。

「うーん……」

疑いすぎてる俺がおかしい気がしてきた。

例えば、幽霊。俺はいないとは思っているが、いるっていう人はたしかに居る。

だから俺は幽霊なんていない！　とは言えなくなってしまう。なぜって本当にいるのかもしれないから。

可能性があるなら否定はできない。そういう生き方を俺はしてきた……。

けど、これは……うーん。

「？　どうしたの？」

急に黙りこくった俺の胸の内を知ってか知らずか、心配した面持ち

で俺を見つめてくる。
くぅぅ、よく見れば可愛い…。

これは、あれか。俺がモテなさすぎて可哀想だから神様がくれたプレゼントなのか。
それとも俺の幻覚なのか…。
いかん、堂々巡りだ。

「いや……君がサンタだというのはわかった。それなら、いったいサンタって具体的にどんなことをするんだ？」

当面の問題は置いておいて話を進めることにする。

「えっとね、サンタとトナカイで決められた地区の家に行って祝福して回るんだよ」
「祝福？」
「うん。色んな家に回ってこれを振掛けてくるの」

――振掛ける？
そう思った矢先、ユメはポケットから小さな袋を出す。

「これの中に入ってる祝福の粉。これを家の上から振掛けるの」

……そんなサンタ聞いたことないんだが。

「え、サンタってプレゼントとか配るんじゃないの？」
「ああ、昔はそれもやってたんだけどねー。今は人間たちで勝手にプレゼントの渡し合いしてるでしょ？
だから最近はもったいないし必要ないか、って事になったの」

なんて経済的なサンタだ。
つか、祝福の粉？　……怪しいネーミングだな。
「その、粉さ。いったいなんなの？」
「祝福の粉は祝福の粉だよ？」
だめだ。聞いた俺がバカだった。
「えと、とりあえず纏めると。トナカイである俺と、サンタであるユメが協力してあらゆる家にこの粉を振掛けていけばいいんだな？」
「そうそう」
俺としては纏めたところで訳がわからなかったが。
「それでね、今日の１１時５９分までに振掛け終わらないといけないから、そろそろ時間が無いの」
「ん……、ああ」
確かに、彼女の言うとおりだったなら今は１０時３０分だ。後１時間２９分しかない。
「でも、振掛けるって、いったいどうやって――」
「これに乗るんだよー」
彼女が指を指した先は窓の外だった。
そこを良く見ると、赤い乗り物のようなものがぷかぷかと浮いていた。
眩暈がする。とうとうおかしくなってしまった、俺が。
もうこれが、俺の幻覚なのか、それとも本当の事なのか全然判別で

きない。

――もういいや、どうにでもなれ。

そんなこんなで俺はサンタと一緒に夜の街を動き回る事になってしまった。

仕事の終わりはクリスマスの始まり

「な、なあ！　聞いていいか！」
「うん！　なに？」
思い切り大声で話す俺たち。
「どうしてこんなに急ぐんだ！？」
「だって、時間ないんだもん！」

5分ほど前に渋々、振掛け作業を手伝う事を承諾した俺を乗せて、物凄く速いスピードで乗り物は動きだしていた。
――これはソリか。
サンタとトナカイといえばソリだろう。
まあ、これの場合トナカイが動かしているのではなく、不思議パワーで動かしてるんだけども。
「それにしても早すぎるだろ！」
「いいの！　仕事を終わらせるのが最優先なんだから！」
大声でしゃべらないと互いに聞こえないくらいにスピードがでていた。
そしてどうやら、サンタやソリはもちろん、下の人々には俺の姿さ

え見えていないらしい。
その証拠に大声を出しても誰も気づかない。
「いやでも、もっと風情ってもんが――」
「ああもう、そもそもこーへーが遅いのがいけなかったんだよ！」
…ぐぐぐ。たしかに疑いまくってた俺だが、流石に信じられないだろあんな短時間じゃ。
「と、というか寒い！」
「頑張って！」
応援されてしまう。
彼女は何も不満を言っていないのに、自分だけ不満たらたらで何か情けない気分だ。
「もういいや――どうにでもなれ――！」
超スピードで動くソリの上から一生懸命に粉を振りまくるユメ。
……シュールだ。
結局、振掛け作業が終わったのはそれから1時間後のことだった。
終わった後、人がいない廃れた山の中へとソリは降りていった。
「な、なんだ……。結局30分も余ってるじゃないか」
着陸したのはいいが酔ってしまって、ヘロヘロな俺。
情けないかもしれないがあの速度でしかもあのカーブの連続では大概のやつは酔ってしまうと思う。
「よ、よかった…。間に合って」

ユメの方も疲れてるみたいだ。そりゃ、あんだけ粉を振掛けてたら疲れるよな……。

「つーか、あの粉は何のために振掛けてたんだ？」
「あれは家を祝福して、皆が幸せに暮らせるように、って」

「家を？　普通人間をじゃないのか？」
「だって、誰かれ構わず祝福してたら粉がもったいないよ。だから家を大切にしてる人にだけ、幸せが行くようにって」

サンタは大工さんか何かなのだろうか。家には優しくて人にはなかなか厳しい。
やけに経済的だし……ううむ、謎だ。

「まあそれはいいや、で？　あとの３０分どうするんだ」
「えっとね、頑張ってくれたトナカイ君にお礼をしようと思って」

「俺に？　…俺は特に何もしてないんだけど」

俺はユメの隣に居て、あーだこーだ言ってただけなんだが。

「いーの、いーの。これもサンタの仕事の内なんだから」
「へー。…で、お礼って具体的に言うと何なんだ？」

「ふふん、それはね……」
不敵に頬笑み、もったいぶるユメ。

「君の願いを一つだけかなえてあげる！」
……そんなことを言いだした。

「ね、願い？　…なんでも？」
「ううん、色々制約があるんだけどー」
そういって大きなボードを取りだす。まて、どっから出してきたそんなデカいもの！
俺の疑問を無視してユメは続ける。
「まず、人の心を左右する事はできない。次に金銭にかかわる事はできない、ほかにも……」
そうやって細かく説明しだした。
ユメが説明するたびに願いの範囲が狭くなっていく。
「ま、まて。全然ロクな物願えないじゃないか」
「むう、失くした物を見つけてほしいとか、色々あるじゃん」
「……」
願いと言われたら、大概はエッチな願いだったりを願うはずだ。俺ならそうする。
しかし、そんなことは勿論、比較的簡単な願いだったとしても願えないほどに制限されていた。
「はあ……。まあ、もともとそんな見返りを求めてやったわけじゃないし、別にいいか」
「……その言い方だとお礼がショボいみたいじゃない」
いや、実際ショボいだろ。
「んー、でもどうっすかなー」
逆に制限されると何を願えばいいのかがわからなくなってくる。

しかも元々、俺は優柔不断。そんなこともあり長い間、悩み続けていた。

「もう、はやく決めちゃいなよ。時間ないよ？」

彼女の言う所によれば１２時なればサンタは役目を終え、消えてしまうそうだ。

ということは、ユメはもうすぐ消えてしまう。

「ああ、もういいや。願いたい事なんて、特にないしさ」

もっとも、大きなことだったらいっぱいあったのだが。

それが願えない以上、取り立てて願いたい願いも特になかった。

「うーん、いいの？　もったいないよ？」

引かないユメ。

その気遣いは有難いのだが……。

「ああ、さっきも言ったけど俺は特に何もしてないし。それに、これはこれで楽しかったから別にいいよ」

「そっか……」

言いながら時計を確認するメメ

つられて俺も確認するが時刻はもう１１時５５分を切っていた。

「そろそろお別れだね」

「ああ」

碌な出会いじゃなかった。それに一緒に居た時間だって極々少しだ。

しかし、それでも別れというのは人を感傷的にさせる。

「しかし、結局何で俺がトナカイに選ばれたんだ？」

「うーん、トナカイに選ばれるのはクリスマスに何かを強く求めてる人に限られるんだけど。こーへーは願いはいらないっていうし……」

「……彼女がほしいってのは、人の心を動かす類の願いだろ？」

「それがこーへーの願いなんだ？」

俺は頷く。

「なら仕方ないかー」

「ああ。でもまあ来年頑張ればいいことだしな」

「む、何か複雑な気分だよ」

「？」

彼女は何故か頬を膨らませていた――とおもったら

「ちょ、消えかけてんぞ！」

気がつけばユメの体が薄くなっていた。

急だったから驚いた。考えてみれば、消えてしまう時間なのだから当たり前だ。

「んー、もう時間ないね…」

淡々と彼女は言う。

どこかさみしい気持ちになりながら俺はお別れを言おうと――

したのだが。

「――――な」

気がついたら彼女の目がものすごく近くにあった。それと同時に覚える口元の違和感。

彼女は俺に、キスをしていた。

「……急にごめんね。願い云々はサンタの仕事の内だけど、これは私個人のお礼。

お礼にならなかったなら悲しいけど」

そういって苦笑するユメ。

「いや……ありが、とう？」

思わず疑問形で感謝してしまう俺。何か恥ずかしい。

俺がそう言うとユメは――あのね、と笑顔で…

「メリークリスマス！」

最後の最後で、やっとサンタらしいことを言いやがった。

「……メリー、クリスマス」

そう言い返した頃には彼女はもう俺の前にはいなかった。

俺が彼女を見る事ができなくなったのか、それとも彼女が消えたのか。

どれが正しいのかはわからなかったが、そんなことはもうどちらでもよかったように思う。

そして俺は、山の上からキラキラと輝く町並みを見渡して――。

「……ここって何処なんだ」

クリスマス当日、俺は迷子になってしまったのだった。

仕事の終わりはクリスマスの始まり（後書き）

最後まで読んでいただき有難うございました。
一気に一日で書ききれてしまったほど内容が少ないです。
けどまあ楽しかったからいいか。
あと、皆さん（少し早いかもですが）メリークリスマス！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0972j/

小さなサンタと孤独なトナカイ

2010年10月10日01時18分発行